

Q7 計算が苦手な子どもには、どう対応したらよいでしょうか

子どもの状態

例えば、「5」という数字の示す量が分からない。
二つの数の大小関係が分からない。
具体物や指を使っても計算ができない。
たし算とひき算を混同してしまう。
計算に時間が掛かる。筆算の桁がずれやすい。
繰り上がりや繰り下がりのミスが多い。

状態の理解のポイント

- ・ 数字と数の概念が対応していない。
- ・ 数の大小、順序性、合成分解の理解が不十分である。
- ・ 数の記憶に課題がある。
- ・ 視覚的な認知力が弱い。
- ・ 注意の持続が困難で、最後まで計算できない。

考えられる対応

一つずつ指差しながら数え、数字カードと対応するように具体物を用いる。

極端に差のある二つの数を見せ、どちらが多いかを当てながら、その差を小さくしていく。

計算の手順に合わせて、「たす」「ひく」の意味を具体的な操作を通して教えるようにする。

+ や - の記号を赤ペンでなぞり、視覚的に認知しやすいようにする。

繰り上がりや繰り下がりの数を書き込む枠を、筆算の問題にあらかじめ設定しておく。(図94)

マス目や補助線の入ったノートやプリントを用意し、位や桁をそろえやすいようにする。(図95)

1枚のプリントに提示する問題数を少なくするとともに、1問分のスペースを大きくし、空白をとる。

計算の仕方を言語化し、教師のモデル、子どもの復唱、子ども自身の言語化による計算の順を進める。(図96)

家庭でも、手伝いの場など具体的な活動を通して、集合数や順序数の概念を育てたり、数の合成分解の操作をしたりする。

$$\begin{array}{r} \square \\ 18 \\ + 5 \\ \hline \end{array} \quad \begin{array}{r} \square \square \\ 125 \\ + 96 \\ \hline \end{array}$$

図94 繰り上がり数の記入欄

$$\begin{array}{r} 425 \\ + 68 \\ \hline 493 \end{array}$$

図95 補助線の活用



図96 筆算の仕方の言語化の例